

YOUNG BUDDHIST ASSOCIATION MAGAZINE

<http://yba.hongwanji.or.jp/>

no 143

Makoto





旅 [tabi]

ちょっと旅に出かけてみませんか。

いや、すでに旅の途中とか。

今回の特集は旅です。

人はなぜ旅をするのか。見たこともない景色を見たいから？新たな出逢いを求めて？非日常の空気を味わいたいから？それとも、まだ見ぬ自分を見つけるため？でもきつと答えは一つではなく、様々な理由が絡み合って、人は旅に駆られるのだ。

よく人生は「旅」に例えられる。けれどもそれは正しい例えなのだろうか、ふと思うことがある。なぜなら旅は、日常から非日常へ向かい、やがて日常へと戻ってくるものだからだ。帰る場所があつて初めて、旅は旅となるのだ。

では人生はどうだろう？人生における帰る場所というのとは一体どこにあるのか。私たちはどこから来てどこへ向かつているのか、わからないまま日々を送っている。それが果たして「旅」と言えるだろうか。

けれどもどうも考えられる。人生は、私のいのちが帰る場所を探す「旅」なのだ、と。それを見つけることができるかどうかはわからない。もしかしたら道半ばで倒れてしまうかもしれない。けれども、私が帰る場所、「おかえり」と迎えてくれる場所を見つけることができたならば、そのいのちの旅は、きつと安心に満ちたものになるように思う。

あなたのいのちの旅に、帰る場所がありますか？



其処散策 i

文章・本多聡

写真・Sachi

京都。

他の都市と比べると、大きな建物や派手な看板はあまり見かけない。観光名所ではなく、あえて自転車で身近な所を巡ってみる。時間を気にせずのんびりと。

ちよつとした商店街や、京都らしい古民家が立ち並ぶ所を、散歩しているだけで、十分に旅行気分を味わえる。

どこに行こうかを決めずに、いつも利用している道とは違う道を通るだけでも満足できる場所、それが京都なのだ。

明治から大正にかけて建てられた洋風な建物が多く立ちならぶ街並みは、どこか京都人のモダン好きさを感じさせる。古い京都と新しい京都が混在した場所はおもちゃ箱のような楽しさ。

個性的なカフェやショップも多く、ぶらぶらと旅行するにはぴったりだ。時間や季節にとらわれず、心が癒される場所が京都なのである。いろんな楽しみ方や感じ方があり、風景そのものを味わえる街。本当にちよつとそこまでという感じで気軽に楽しめる場所。京都散策はとてもいいものだ。



其処散策 ii

文章と写真・中山真理子

小学校へ行こうと思い立って、まずマスクとメガネを装着。小学生の頃はまったく縁がなく、必要のなかった代物だが、私の母校は山の中に建つため、もちろん通学路も山道。その道は杉だらけで、最近花粉症になった私にとって、その道は鬼門以外の何物でもない。気合を入れて歩き出し、山の中へ入ろうとするが、何てことはない。問題のその道はアスファルトで美しく舗装されていた。気が抜けつつも真新しい家が立ち並んだ道を歩きながら、時間の流れを思う。

せっかくだから今日は冒険しようと思つて、不気味でいつも避けて通っていたお寺に足を踏み入れた。長年避けていただけに、どきどき感はかなりものもの。お寺は少し山の方へ入ったところにあり、昔の山道を思い出して少し懐かしくなる。そこには子護大師がいた。子どもと戯れている大師の像である。小学校の近くに子護大師とはなんとベタな。だがそのベタさにちよつと感動する。



当時片道40分かかった道も今では半分の時間で到着。このご時勢の為だろう、私がつ通っていた時にはなかった立入禁止の札が校門に出されており、小学校に入ることには出来なかった。少し寂しく思いながらも母校の目の前でUターン。帰り道を歩きながら「時計のおっちゃん」と呼ばれていたおじさんのことを思い出す。その人は小学生在が帰る時間帯になるといつも通学路に立って、私たちはそのおじさんを見つけたたびに「今何時ですか」と聞く。するとおじさんも、いつも腕につけていた腕時計を見て「〇時だよ」と答えてくれる。その何でもないやり取りが楽しくて、毎日同じように聞く私たちに、おじさんも飽きずに付き合ってくれていた。いろんな人に見護られた小学生だったんだなあと、思いを馳せながら歩く過去への旅。

子護大師の像や時計のおじさん、私たちが子どもを愛しく思ってくれていた大人たち。あんな大人になろうという人生の目標が、また一つ出来た旅だった。そう、今来た道を取りながら感じていた。

A photograph of a row of five seated Buddhist statues in a cave. The statues are dark and weathered, with some showing signs of age and discoloration. They are arranged in a line, facing forward. The background is dark and textured, suggesting a cave interior. The lighting is dramatic, highlighting the statues against the dark background.

南天竺にて。

歴史に埋もれた石窟寺院。

八宗の祖、ナーガールジュナ。

いや、そんなことより、

人と時間と思いがけない出遇いが待っていました。





ナーガールジュナコンダの僧院の後。現在は、ダム建設のために多くが水没してしまったが、貴重な遺跡のみをコンダ（丘）に残した。写真は上座部と大衆部の礼拝場所が混在する場所。この仏像は大衆部の礼拝対象だったといわれる場所に設置されているレプリカ。

今号のまこと編集時期にさしかかっていた頃、地元長崎の宗教連合の団体で南インドの聖地巡りの旅の話が出ていた。

2年前のテロで被害にあったムンバイも個人的なスケジュールで一人で通らなければならぬという不安もあったが、今回を逃すと一生選択しないルートだったのでに思い切って参加することにした。

メインは仏跡地のナーガールジュナコンダと石窟寺院とキリスト教の聖トマスゆかりの地を巡るというもので、インド半島の下半分を移動する強烈な行程である。

今回でインドは二度目。まこと140号でも記事を書いたのだが、相変わらずどこにいても混沌とした街並みと、愛想の良い田舎の子どもたち。こちらが手を振れば、必ず手を振り返してくれる。

こちらが微笑みを見れば、微笑み返してくれる。コミュニケーションの仕方ってこんなんだっけ…と日本にいる時の人間の冷たさと思わず比較してしまう。

行程中の話はさておき、最終日のこと

だった。前日までのナーガールジュナコ
ンダ（龍樹菩薩ゆかりの地）の到達で、
仏教教団の進化と衰退を目の当たりにし
て旅の目的としては満足し、後は日本に
帰るだけだと思っていたのだが、最後に
罰ゲームが待っていた。最終日の港町コー
チから数十分行った場所にある、聖トマ
スの足跡が残る丘に登るというものだった。
単なる観光と思っていたら、片道2
キロの半岩斜面。普段の運動不足からか、
半分も行かない地点で吐き気と軽い脱水
症状。目の前にある道は、すべて岩である。
これでは軽いトレッキング状態。暑
さと体調不良でフラフラになりつつ山道
を登りながら、なぜインドにはスポーツ
ドリンクが売ってある自動販売機がない
のかと愚痴をこぼしたのだった。

個人的なスケジュールの都合で、ムン
バイに飛行機で行かなければならない予
定が差し迫っていた私に対して、インド
人の係員がこういった。

「飛行機。時間ガアリマセン」

そうか。もう登るのをやめて、空港に
行く時間までここで待っていようと思っ
たその時だった。

「あなたの時間じゃないよ。
我々の時間だよ」

日本から同行した添乗員がこう言い返
したのだった。普通、海外に行つて現地
人に「時間がない」と言われれば「では
急ぎましょう」と単に意識もしないのだ
が、この言葉は色んな意味でインドとい
う国を理解した者でなければ言えない。

そもそもこの日本の添乗員とは、イン
ド旅行の超ベテランであり、僧侶よりも
仏教の歴史やインド事情に精通している
人で、愛すべきインド旅行のスペシャリ
スト。そんな彼だからこそ言える言葉な
のかも知れない。そもそもインドという
国は、のんびりしている国ではなかった
のか。いや、正確には時間にのんびりな

国ではなく、ゆつたりと流れる時間のあ
る国なのだ。今という時間が長かろうが
短かろうが、時間の長さは変わらない。
結局、今の時間に生きているのは私であ
り、旅をしているのは私なのだから。

結果、なんとか登りきった私は山頂に
ある教会で、聖トマスの足跡だと言われ
るものを見て、この疲労感に対する報い
がこの程度かと正直思ったものだが、登
りも下りも、途中で巡礼に向かう人々の
熱心さにはある面、羨ましさにも似たよ
うなものを感じたのは事実だった。歩き
ながらお経のようなことばを家族で、そ
して仲間で言い合いながら巡礼へ赴くの
である。愚痴が出るかお経が出るか。私
は前者の方だった。

そんな自分を見つめつつ、二度目のイ
ンドはムンバイへ足を進め、帰路に着こ
うとしていた。

※①新約聖書に登場するイエスの使徒の一人。

インドに赴いて宣教したと伝えられる。

※②ナーガールジュナの漢訳。南インドの生れ。

「空」の思想を大成して大乘仏教の教学の基
盤を確立した。真宗七高層の第一祖。

彼の便り（八）



文・長谷川憲章（仏教青年連盟指導講師）

「月日は百代の過客にして 行かふ年も又旅人也」

有名な、『おくのほそ道』の冒頭の文句です。人は、人生を「旅」に譬えてきました。私も、沢山ではありませんが、さまざまな所を旅してきました。思いもしなかった風景、さまざまな人との出会いと別れ、浮かれるような楽しさと、時の過ぎゆく淋しさ、時おり訪れる試練・・・・考えてみると、まさに「旅」と人生は重なり合うようです。

仏青の皆さんも、それぞれの「旅」をめいめいの姿で歩んでおられると思います。一生懸命歩んでおられることは間違いないでしょう。

一度しかないこの「旅」において何が大切なのだろうか・・・と良く考えました。私の人生という「旅」は、長かったと振り返るほど長くはありませんでしたが、それでも時には脇道にも入りました。上り坂も下り坂も、砂利道もぬかるみもありました。私以上に大変だった方から見ればたいした事はなかったかもしれませんが、それでも私にとっては大変でした。

でも、実際の「旅」においても、人生という「旅」においても、私には帰る所と、一緒に歩んでくれる仲間が存在してくれました。私を待ち、呼んでくれている親や友人のいる故郷。ため息をつきながら試行錯誤していた時、時に励まし、時に叱責しながら、ともに歩んでくれた仲間たち。これまでの道を安心して進めたのも、さまざまな試練に際して、行くべき道を探しつつ歩んでこれたのも、そんな支えの中で初めて成立したのです。今「旅」において大切なのは、この二つだと確信しています。

人生という「旅」の帰る所は明らかにありますか？一緒に歩んでくれる仲間はいますか？

耳をすまして聴いてみましょう。私を喚（よ）ぶ声と、より添って歩いてくださる方がたの足音を。

スタボ、編集後記。

南インドの記事は、個人的にWEBのどこかにアップする予定なので、見つけていただければ幸いです。今回で任期最後の編集となりましたが、精神力とマシンにお小遣いをつき込んだ日々でした…。そういえば、若気の至りでWEBサイトを格好良くするんだ！と意気込んで京都に向かった4年前。気づけば紙の方にハマってしまった(笑)。仏教のデジタルコンテンツに試行錯誤した日々はもろくも崩れ、この仏教界がまだまだアナログ主流であることで、紙がまだまだ通用しつつ、発展しつくされていない分野であることに気づかされる。これからは頑固にWEBの世界に戻ります。ありがとうございました。(加藤心樹)

冬場 自転車でお参りに向かう時のこと。行きは向かい風。で、帰りも向かい風(苦笑)。気持ちが悪くなる。でも、風を吹かせているのは誰かと分かったら、愚痴も「ご苦労さま」に変わったような気がしました。合掌。(藤原慈信)

2年間 計4回に渡ってこの「まこと」の発刊に携わらせていただきました。自分の写真や文章がこうして形と成るのは、気恥しさもありつつ、嬉しいものでもあると感じます。今後はより多くの人の目に触れるよう、ゆくゆくはiPadに配信、なんてことも夢見つつ、後進に譲りたいと思います。2年間ありがとうございました。(日下賢裕)

とうとう 学生の身分を剥奪される季節になりました。新しいことだらけで不安は尽きないけれど、いつ振り返っても「あの時の自分も頑張っていた」と自分に胸が張れるような社会人になろうとブチ旅をして思いました。(中山真理子)

旅といえば 一人のおばあちゃんを思い出す。その方は八十歳を越えて何度も海外へ行き、私と会う度に旅行話を聞かせてくれる。その方を見ていると、人はやりがいや希望を喪失しない限り、青春を謳歌し続けられると思わされる。元気なおばあちゃんを目の当たりにして、自分の方が老け込んでしまっていると反省です。(宮崎寿洋)

小学生 の頃、遠足の前夜は楽しみであまり寝つかなかったのを思い出しました。まことの編集はこれが最後となりましたがこれからもまことを愛読しようと思います。(本多聡)

「まこと」 が発行されている頃には、次の旅が始まっていると思います。2年間という短い時間でしたが、微力ながらお手伝いできたかな？と思っています。今はまだ旅の途中です。いつか旅を終える日まで楽しく、時には立ち止まり進んでいけたらいいなと思っています。(平さとみ)



KYO-ZAI **COLLECTION**



腕輪念珠

(連盟価格 120 円 / 一般価格 150 円) ※

(※ 100 連以上一括購入の場合は、1 連につき 20 円引きをいたしております。)

言わずと知れた仏教青年連盟「腕輪念珠」。阿弥陀様、親鸞聖人のみ教えを中心とした日々の生活で、また仏教青年会活動で、長年にわたり多くの方にご好評いただいております。カラーは、緑・紫・エンジの3種類。個別包装いたしておりますので、仏教青年連盟のみならず様々な行事での記念品としてもお使いいただけます。

その他にも仏青には、たくさんの教材があります。

○ストラップ (連盟価格 500 円 / 一般価格 550 円)

○トートバック (連盟・一般共通価格 300 円)

○クリアファイル (連盟・一般共通価格 100 円)

○YBA タオル (連盟・一般共通価格 100 円)

○ナップサック (連盟・一般共通価格 100 円)

教材のお問い合わせは、下記の連絡先まで。

浄土真宗本願寺派 仏教青年連盟事務局

Tel : 075-371-5181 (代)

e メール : yba@hongwanji.or.jp

ホームページ : <http://yba.hogwanji.or.jp/>

神戸にきてな

文章・藤原慈信

「神戸で道を尋ねれば、南北の方角を「上・下」や「山・海」と表現されることが多く、的確である。神戸は、山と海に挟まれた『坂の街』なのだ。

今年の8月に開催される『全国真宗青年の集い、近畿大会 in 神戸』の開催地は、その名の通り、ここ神戸。既に観光地としても有名だが、改めてこの街を知っていただきたい。

まずは、大会の開会会場となる神戸別院。通称『モダン寺』。その名前の由来は、日本で初めてインド仏教様式を用いた鉄筋の大寺院で、その斬新なデザインから放たれる異彩な姿を、地元の人々から「モダン寺」と呼び親しまれてきたことに由来する。また、平成7年の阪神大震災後初の新築寺院で、神戸復興の象徴としても知られている。



本願寺神戸別院



1.17 希望の灯り

現在の神戸を語る上で、「震災」という言葉は外せない。神戸市役所の南に位置する東遊園地の中に『1・17 希望の灯り』のモニュメントがある。その石碑にはこう刻まれている。

「たった一秒先が予知出来ない人間の限界」

その深さに身が固まる。ただ「できる限り見てください」としか語れない。『希望の灯り』の石碑にも刻んでいるが、「震災が残してくれたものは実に厚い。大会に参加していただいてもその感覚はひしひしと感じていただけるだろう。」

大会のテーマは『FUTURE』。あなたの未来って何ですか？私の未来って何ですか？

Makata

No. 143

浄土真宗本願寺派 仏教青年連盟機関紙 2010(平成22)年3月25日発行 印刷：創文堂印刷株式会社
編集／発行：仏教青年連盟 広報委員会 〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下川 浄土真宗本願寺派 宗務所内 TEL: 075-371-5181 (代)

2010 SHINSHU YBA CONVENTION KINKI *in Kobe*

FUTURE

08.06 fri. _ 07 sat.

2010全国真宗青年の集い 近畿大会 in 神戸

滋賀 | 京都 | 奈良 | 大阪 | 和歌山 | 兵庫 共同開催

【お問い合わせ】実行委員会 事務局(兵庫教区教務所内) TEL: 078-341-5949

みんな
神戸に
来てな。



PROJECT 2010